

第一回

お金・労働・消費

バザーが盛況のうちに終わりました。子どもたちも好きなイベントで、おさいふを握って買い物を楽しみました。そんな折りに、ちょっと考えたことがあります。

お金って何なの？ お金が大事って言うけれど、どうして仕事ってしなきゃならないの？

「マネー」が「ゲーム」になり、「フリーター」や「パラサイトシングル」がはびこる二十一世紀初頭には。答えがむづかしい問題です。

宮崎駿らが作った「未来少年コナン」という作品があります。私が小学生の頃に、NHKが初めて放映したアニメとして人気を博しました。主人公の「コナン」が、魚を養殖しているいけすを見つけて、そのおじさんにごうたずねました。

「おじさん一人でこんなに魚を食べるの？」

おじさんは笑って答えました。

「わしはパンは作らん。しかし毎日食ってる。わしは服は作らん。しかしこつこつ着てる。

その代わり、わしは村のみんなが魚を食べるのようについでしている。このいけすの魚はわしのものだが村みんなのものである。」

このシンプルなお答えには、妙な説得力があります。

いわゆる第一次産業や第二次産業というものを相手にする仕事の割合



割合が減って、サービスという曖昧なものを売る仕事の割合が増えた社会では、こういう単純なことが忘れられるのかもかもしれません。

モノが見えにくくなる産業構造とともに、お金も抽象化（形がなくなる）していきます。大判小判は、お金自体に価値があったわけですが、今の二万田札という紙切れには一万田の価値はありません。そこに印刷してある数字が大事なのです。それならばお札というモノがなくても、通帳の数字でいい。カードでも買える。

お金がたんなる数字になったとき、その裏にある労働は見えなくなっていく。労働の、つまり身体のもとなわな幽霊のようなお金が社会にはびこっていきます。

お金マスターが徘徊する社会に、今の子どもたちは産み落とされました。そこでお金を安易に握らされることで、子どもたちもマスター化していきます。父母の汗水を想像するところできない「お金マスター」。

服を作らない私が服を着るのは、服の代わりに何かを生産するからです。「大人になる」「社会に出る」「一人前になる」とは、働くことで労働ネットワークに組み込まれ、その中に位置を持つことです。

そのネットワークに入っていない子どもたちは、基本にお金を持てない人のハズです。労働の裏付けのないお金は「あぶく銭」、バブリーマネーでもいまいまじゅうか。だから子どもにあまりお金を持たせる必要はないのです。

「お金があればなんでもできる」と言ったりしますが、お金があつてできることと「言え、買おう」とは、買おうとしてみようと思えば見出し、買おうとすることが大きな関心事になっているのが、今私たちが住んでいる「消費社会」です。これをよくよく考え直してみなければなりません。子どもは消費社会でちゃんと育つのかという問いを、しな。

第二回

とんでも消費者

週明けに気がなれようがあります。「ジャスコ」に行っておね買ったという声。必ず言う直ぐおねです。「買ったではなく、買ってもらったでしよう」。

何か壊れても「まだ買えばいい」。友だちにものをあげているので私が「これは〇ちゃんのためにお父さんお母さんが買ってきたものでしょか。」という「たぶんおねか、うう」。

今年の正月はお年玉の由来を話しました。その時、お金は大事な言いました。なか、それは、抽象的な数字ではなく、お父さんお母さんの労働の対価だといつを伝え、だから大事だと言いました。その上で、お金で買えないものがある、と。

大人はややもすると何でもお金で解決しようとしています。そんな大人が作った社会に、子どもたちも住んでるので、その発想がうつります。誕生会で気がなるのは、「大きくなったからケーキ屋さんになって、ケーキを売りたいです」。自分の娘もそうだったので、ほんとに「売りたいの？」。売りたいの？と聞いたら、作りたいのだと答えたので、じゃあ売りたい方がいいて言いました。

ケーキ屋さんで見るお姉さんの姿にあらがれてケーキ屋さんになりたいういふ問題はないういふ。ただ、ケーキを「作りたい」は、さすが、ういふの間にか、なるとなると「売りたい」「ういふの替わういふ。私たちが買わういふなければならぬものは、売ういふものを買ういふ、奪わういふものがあういふ。それは作ういふ。

昨年、年少組の男の子が生けた花



消費者とは、必要なものがある、買う人といふです。できあいのものを買えば作らういふ。作ういふを外部委託するといふ。作ういふになり、それと引き替ういふ自分の能力がなういふ。買ういふは、作ういふという能動性や創造性の芽生えの余地がなくなういふ。

今私たちは、多くのものを買っています。かつては各家庭で作ういふ雑巾、おしぼり、漬け物など、今も買ういふおねいふもなくなりました。だから、昔より消費生活の割合が高くなういふ。ういふも消費者なのです。消費者が求めるのはサービスのよさ。サービスがよういふは、自分にかういふれる度合いが高くなういふか、自分の思う通りになる割合が高ういふかといふです。サービスしてもらういふのが当たり前になると、「何かしたい」ではなく、「何かしてもらういふ」とういふ自分の願望をあらういふ抱くようになういふ。

また、子どもたちが老人たちがお金をえもてういふは、同じ扱いをういふ。大量消費社会は、まるで「金のもういふの平等」で、年配の人へ敬意といふ「質」を、お金の「量」にういふて平らういふ。

労働の裏付けのない子どもにお金を持たせるのは問題だ。子どもにたくさんモノを買ういふと、子どものためにならない。お金を使わういふ遊ばういふ子どもを育成するといふ。そして大量消費社会が環境問題を引ういふ。

消費社会のなかで失ういふういふもの、おわういふただけでういふか。



花を生けるよろこびは花を買うよろこびではない

第二回

木に森を見る

今年の園長通信は「二十一世紀をむかえるために」と題されています。二十一世紀はじめに二十一世紀なんて、園長、また大風呂敷ひろげやがったなあ、と思われた方もおられるかもしれません。そう。大風呂敷を広げるのが園長の仕事の「つだ」と思っています。私たちは世界という大風呂敷に包まれているのですから。

赤塚不二夫さん「くへん」ならぬました。赤塚さんの言葉で私がよく引用するものがあります。「この頃の漫画家が駄目なのは漫画読んで漫画描いてるからだ」。

続けて話します。「かの宮崎駿は、最近のアニメーターはアニメ見てアニメ作ってるからつまらなくといいますが、ぼくの友だちのもとでパンクスはこの頃のパンクはダメだよ。パンク聴いてパンクやってるからダメ」といって、お世話になったある著名なお坊さんは「このちよりの大事なものをいって、初めてこのちよりのものをいっていいよ」といってました。

分野は違いますが、同じようにいっているのがお分かりだと思えます。「この話を私は「本物をよく見よ」といって話を語るためにも使います。表現のここには体験があるといっていることを語るためにも使います。

縮小再生産の不毛を語るためにも使いますが、第一義的には「生きていくためにこの世の仕組みを構想」を伝えたくて、話をします。何かが問題になったらね、その「まじ」を見る。その「何か」を成り立たせている「仕組み」を見る。それが肝要だといっています。

ところで、産業革命以降、世界の中で人間が実力をつけてきました。馬力や人力は機械が肩代わりし、生産性は飛躍的に高まり、二十世紀は大量生産—大量消費—大量廃棄というしくみが大成しました。その成功はアメリカの覇権と別ではありません。成功した人々は、パーティーのような生活を始めました。パーティーが始まった夕暮れが二十世紀です。

夕暮れの国々のパーティーは夜になって一層もりあがり、人もたくさん増えてきました。夜を風のように明るくする力を手に入れたからです。それは太陽を盗むようなことでした。ところが、二十世紀後半になり、気づいた人たちが現れました。「このままパーティーを続けていいよいか。続けていけるのか」と。そして、パーティーを続けて行くには「この星がある」と。二個も四個も必要だとわかりました。

それを知った人は、二種類の態度に分かれました。「なんとかしなきゃ」と立ち上がり、パーティーをぬげようとする人。「わかっちゃいるけどやめられない」と言い訳をする人。「パーティーを続けてどこが悪い。おれの権利だ」と居直ってパーティーを続ける人。



©赤塚不二夫

今は二十一世紀ですが、それは夜中の世紀です。「この世紀中に朝が来る」はないうでしよう。二十一世紀の過剰方次第では、二十一世紀という朝は来ないかもしれません。夜中を生きる私たちにあって、希望といえることは、朝を待つ心で過ごすことです。二十一世紀をむかえるために「二十一世紀のうちにやっておかなければならないことがあります」。

子どもは必ずどこかある未来です。だからこそ、数世紀という枠組の中で、幼児教育の位置を確かめたいのです。

第四回

主役と脇役



先日の「子育て共室」ではテレビ・ゲームの功罪がテーマでしたが、あのテレビ好きの子どもさんが、プロックを買って与えられたおかげでもあまりテレビを見なくなるといった話がありました。いい話です。テレビを見てるときは視覚と聴覚が受動的に動いているだけ。プロックは、手を使う。視覚・聴覚・触覚が能動的にはたらき、創造力を手から放出し、モノの形を変える。ヒトは手足が手になった時に成立した生き物です。

ところで、日本のテレビは舞台に立つ人の出しものが出尽くしたのか、舞台裏にカメラを向けるようになりました。さらに、舞台裏に飽きると素人を相手にするようになりました。隠し撮りをしたら、やらせが隠せぬと思っっているかのよう。

そんな中で、従来ワキ役で活躍していた人にもスポットライトが当たるようになりました。縁の下の力持ちがいるんだよ、主役を引き立てるワキ役も大事なんだよ、それを知るのには大切なことです。

どんな舞台や仕事であっても、目立つ人を、何人の目立たぬ人が支えているのか！ もう少し広げていうと、自分が生活していることの裏とこれだけの関係の綱がはらめはらめなっていることが！

ところが、ゆがみが生じます。ワキ役「スポットライトを当てて主役みたいになってしまいます。その注目の仕方では、結局、「みんなが主役」と



いう考えに行き着きます。これを「悪平等」と言います。この国の深刻な病巣の一つです。ワキ役はワキにいるから味があるのです。

近年の運動会では「みんな一等賞」、劇では一人でお姫様をするような主役は立てない。みんなが主役。つまり主役もワキ役もな

い。日なたがあり日陰がある。陰があつてこそ日なたがまわだつのです。「山陰」は差別用語ではなく実はとても素敵なことなのです。

日本の家の照明は、貧しいと評されています。部屋のとっぺんにつけた電気で部屋全体を白々と明るくしてしまつからです。それは、なんにでもスポットライトを当てるのと同じ精神ではないでしょうか。北欧などの部屋の照明は、その位置や口の配慮から影ができるように演出されます。陰がある、騒がしさがそこに吸われぬように、落ち着くもので



電気を消してロウソクを灯してみましよう。影とつけあった光、そしてゆらぎ。明かりのあて方がひとつの心のあり方と結び

ついていることが感じられます。

「みんなちがってみんないい」は、「みんなが一番」とはちがいます。一位は一位。二位は二位なのです。二位がいるから一位がいる。一位を支えているのは二位三位四位なのです。ですから、びさい運動会ではみんな一等等なんて欺瞞的なことは言いません。勝ち負けが、うれしい悔しいという気持ちの幅を広げます。精神を豊かにします。競争は（行き過ぎがなければ）必要です。

びさいフェスティバルでも主役とワキ役があるような劇ができたら……と夢想する園長でした。「しほの子、出番が少ないうー」と、不満がたぐれぬほどかなあ……



第五回

ふるさと創生!!

魚の切り身が泳いでいると思っっている子どもはびっくりにはないでしょう。海あり山ありという境港の風土が子どもたちを育てているからです。でも、境港の子どもたちには体験活動が不足しているというデータもあるようです。せっかくの「地域資源」も活用しないのでは、無



いと同じ。そこで水産庁境港漁業調整事務所資源管理計画官の上田勝彦氏を講師にして、はじめはお母さん方、次に園児たちと境港「水産物直売センター」を訪ねました。狙いは、いっしょかありました。

① 本物を見る

故赤塚不二夫は漫画を見て漫画を描いている今の漫画家を批判したことは、第二回園長通信で述べました。人間の作り物（人間の意図の内部にあるもの）を原点とするのではなく、人間が作っていないもの（人間の意図を越えたもの）を原点としたとき、かきのない創造性がわき出しているように思います。だから、幼児教育では教科書で学ぶのではなく、体験で学ぶのです。

子どもたちは図鑑を見ていろんな魚を知っています。それも大切な。図鑑で魚の名前を覚えることも違いを見分けるセンスを養う。その知識が現実とマッチングするようで、ほんとの生きた知識になります。

本物を見聞きはすべし、それが体験というものです。



五感を使えば使うほど、体験の入力は大きく深くなり、それによって表現の出力は多様で豊かになってゆきます。

② スーパーなどの消費地ではなく生産地に近づくことでの体験をする
今の消費文明の中で子どもが健全に育つか疑問です。消費文明の問題点は、第一、二回の園長通信でのべたとおろです。

③ 境港という地域にあるものにかかわる

「故郷喪失性」は現代人の運命だと哲学者は指摘しています。出生した場所だからって、ただちに故郷になるわけではありません。

土地のものに親しんでこそ、子どもたちにとって境港がふるさとになっていく。年長けて、一旦県外に出ても、心身に根を張るふるさとと力が、再び境港に帰らしめる。それが長い目で見て、少子化や過疎化への対策になると思われま。

幼少の頃のやわらかい記憶に土地の風物をしっかりと刻み付けておく。思い出に残らなくても、体験として蓄積されていくはず。その蓄積がその人なのです。その人の歴史なのです。

④ どこから来てどこへ行くのか

人間の社会では、ものが、今ここで使い捨てられる商品という姿をしています。そんな浪費社会で見失われることは、あらゆるものが厚みを持つことになるように思います。来し方行く末の奥行きを、魚を見ることができるようになれば、私たち自身の来し方行く末も問われてくる。「今やえよければいい」という薄っぺらな発想が破られ、人間が歴史的存在であるという事実がたちのぼってくる。そうしたら人はもう少しまともな社会を作れるようになるように思います。

